

メキシコ・シテイでの 第25回 O M E P 世界大会に参加して

上垣内伸子



二〇〇七年七月十八日から二十日まで、中米メキシコ的首都メキシコ・シテイにて、第25回 O M E P (世界幼児教育機構) 世界大会が開催されました。

日本からの参加者は、夏休み前の学期末ということもあり、普段より少ない二十三人でしたが、全体では二十八か国から約千人の参加者があり、会場は熱気にあふれていました。雨期というのに照りつける

太陽と標高二三〇〇メートルという高地、酸素が薄いとほととも思えない陽気でエネルギーが溢れる。シンのノリに、頭はクラクラになりながらも、ありったけの笑顔での交流となりました。

O M E P は、第二次世界大戦が終わって間もない一九四七年に、イギリス、スウェーデン、ノルウェーなどヨーロッパの女性のグループによって設立され

た幼児教育に関する国際機構です。設立者らは、子どもたち、殊に第二次世界大戦の戦火の下で暮らすことを強いられた十歳以下の子どもたちの置かれた状況を憂い、OME Pの活動を通して教師、保育者、教育専門家、親、政府関係者を支援することと、世界中の幼児に彼らが受けるべき適切なケアを与えることを決意しました。以来、地球上のあらゆる所に住む幼児の利益と幸福の追求のために国境を越えて協力し合い行動を起こすという目的の下に、現在では世界六十か国以上でOME P国内委員会が設立され活動しています。

日本委員会は、一九六八年の世界総会で正式に承認され、約二百人の個人会員と十四の団体会員が、アジア太平洋地域の国々を中心に世界各国の委員会と交流・協力しながら活動しています。三年に一度開催される世界大会は、各国のOME P会員が集い、それぞれの国の子どもや幼児教育の現状を出し

合って討議し、共同して取り組むべき課題を確認していく場です。と同時に、世界の保育者や保育研究者、子どもと保育にかかわる人々が親しく交流し友情を深めていく場でもあります。保育者という親和性と共感性豊かな人々の集まりであり、言葉が充分に通じなくとも、気持ちが通い合う大変居心地のよい大会なのです。

今大会のテーマは、“The Children’s Right to Education at the Beginning of the Third Millennium”（二千年紀の始まりにおける教育に対する子どもの権利）。二十一世紀に入った現在においても、子どもたちの教育を受ける権利は十分に保障され得ているとはいえない状況が、特定の地域だけではなく、世界中で見受けられます。就学率の低さというような二十世紀から継続している問題もあれば、地域社会や家庭の変化に伴って新たに生じてきている問題もあります。

マリア・オルヴェラ O M E P メキシコ委員会会長は、開会のあいさつで、「保育者は、グローバリゼーション、不寛容さ、暴力、家族の崩壊、虐待、育児放棄、経済破綻、失業、差別などといった多くの危機的状況にさらされた社会の中で子どもを保育することを強いられている」と指摘し、「この大会を、子どもたちがその子ども時代を充実して生活していけるように、そして社会に責任をもって参画し信頼される人となるように、子どもたちが今よりいっそう人道主義・博愛主義に基づいた社会を築いていくことの土台となる質の高い教育を受ける権利を再び確かなものとしていくという誓いを新たにす大会としよう」と呼びかけられました。

初日には、イリノイ大学リリアン・カツツ博士による、『就学前の子どもの教育における家庭の役割』という講演がありました。その中で、親や家族が園生活に関心をもち、園の活動に参画し、保育者

と情報を共有し協力することで、子どもの学びと発達が促されるのに、そのような親と保育者の協働が困難になってきていることが指摘されました。

「女性の就労増加と職場での地位向上、経済状況の悪化などによって、多くの親（母親）は、これまでに以上に強いストレスにさらされるようになってきた。職場で重い責任とハードな仕事にさらされ帰宅するために、親が、もうこれ以上自分は子どもや子どもの教育にはかわりたくない、教育については保育者が責任をもってほしいと要求することも起きてきている。このような親からの要求と、親からのかわりが充分ではないと感じられる子どもからの強い要求の双方に 대응しようとするために、保育者は、これまで以上にストレスフルな状況に追い込まれている。家族と保育者が相互に協力し合い支え合って子どもを育てることの重要性は明らかであるのに、それが機能していないという問題が生じてき

ている」と。

日本でも春ごろから、理不尽な要求をする「モンスター・ペアレント」と、それへの対応に苦慮する教師という図式が話題になっていました。そのニュースを聞いたときには、「モンスター・ペアレント」とは、日本特有の問題だろうと考えていました。ところが、ほかの国でも同様のことが起こっているということです。カツ博士が述べたアメリカだけでなく、ヨーロッパやアジア、アフリカからの参加者からも、同じような状況があることが語られています。日本では「モンスター・ペアレント」と呼んでいるという、「なるほど」とか、「わかる」という反応が返ってきました。

OMEPPの世界大会に参加すると、このように、日本固有の問題と考えていたことが、ほかの国でも同様に起きている問題であると気づかされるのが毎回あります。

一九九八年のデンマーク大会では、親教育・親支援が話題になりました。これからの保育者の仕事は、子どもの保育と親教育・親支援の比率が二対一、親への対応に比重が重くなるという共通の認識がありました。ヨーロッパからは、よりエコロジカルで安全なおもちゃや生活道具を選択することを親に教育していく必要があると。アフリカからは、水くみや子守をさせられている小さな女の子を幼稚園に来させるために、幼児期には遊びが欠かせないことを親に伝え、説得することが重要な仕事であると。アメリカからは、近くに親戚縁者もなくエイズなどで臥している親の適切なケアのコーディネートや、英語の読み書きができない親自身の学習機会の設定が話題として出されました。ちょうど日本も、幼稚園・保育所での育児相談・子育て支援の必要が指摘されているときなので、内容は各国の社会状況によって異なるけれども、世界中の保育者が共通し

て、子どもの保育一に対して親教育・親支援二という構えでこれから仕事をしていくことが求められているのだと思います。

二〇〇一年のチリ大会では、〇歳から四歳の生活と保育の質を保障するために、家庭の育児力教育力を支援する必要性が語られました。特に乳児期から四歳未満に着目し、早期から家庭教育に介入していくことが、子どもが十分な教育を受けその能力を発揮するためには欠かせないことであり、それが子どもの権利を保障することでもあるという論旨でした。日本でも、就園前の家庭保育の親子の支援が課題になっているときでした。南米では、育児に関する知識の啓蒙という切り口でしたが、日本では、家庭で保育する親の孤立化や心理的ストレス、虐待への対応が課題でした。

二〇〇四年のオーストラリア大会では、子どもの育つ環境や家庭の多様化と格差の拡大ということが

指摘されました。多様化と格差には二つの状態があり、一つは途上国と先進国という国や地域間の格差拡大。もう一つは、特に先進国で見られる国内での格差拡大であるということです。ことに後者の先進国の国内格差は急速に拡大しつつあり、深刻な社会問題になっていること、その現状を把握して対応することが保育者には求められていることが、移民や少数民族の社会的地位の問題、失業問題、育児期の親の犯罪や疾病の増加などという例を挙げながら、いくつかの講演の中で、共通して述べられています。日本でも、「格差社会」という言葉がよく聞かれるようになっていた時期なので、表面的な豊かさの裏にある子育て世代の経済的困難さといった現実を、リアリティをもってとらえて保育していくことの必要性を確認させてもらった気がしました。

世界大会への参加は、日本の置かれている状況や現在の課題を、ほかの国々の状況と相対化して見る

こととなり、文化社会状況は異なりながらも、保育を取り巻く（人間を取り巻く）課題には共通性があり、世界規模での人類と文明の発展のうねりの中に日本も私自身もいることに気づく機会となっていました。そして、日本に帰ってきてからは、大会で知り合ったこの人もあの人も同じように努力していると思うと、目の前の保育（私の場合は保育者養成ですが）に新たな意欲をもって向かう力がわいてくるのです。

メキシコ大会では、親の幼児教育への参画、各家庭の文化背景や親のニーズや意見をカリキュラムにも反映させていくことが、何人もの講演者やパネリストから話題として上りました。子どもの生活の質の保障、教育（保育）を受ける権利の保障という観点から、親教育、親支援をしていくことが数年前までは指摘されていたのですが、親はもはや教育や支援の対象というだけでなく、保育に対して意見を表

明し保育計画や保育カリキュラムにも参画していく存在であるということなのでしょう。保育者の側から語るなら、それぞれの家庭のもつ文化や価値観を保育に反映させていくことで、保育は子どもにとってより適切で豊かなものになる、親（家庭）と共にカリキュラムを作成することは、よりの確に家庭のニーズを組んだ保育を行うことにつながる、ということになるでしょう。保育者と親（家庭）との協働性を図っていくことが、現在の保育課題というわけです。「モンスター・ペアレント」の問題も、親のニーズをくみ上げようという文脈の中で生じる問題ととらえることができます。

私自身は、保育者と親とが共に保育をつくることのおもしろさを、自分自身が園児の親として経験してきました。しかし、今回のあまりにラディカルと感じるほどの保育者と親との対等性の指摘に、少し行き過ぎではないかと疑問を感じる場面もありまし

た。保育者には、親のニーズを受け止めて充分な話し合いをもちながら、なお子どもにとっては最善という視点を大切にして保育を計画していくことが求められ、それが、今日的な保育者の専門性なのかもしれない。まだまだ未消化な状態ですが、次の二〇一〇年のスウェーデン大会まで、この課題について考えていきたいと思っています。

大会の前日と期間中に、二か所の保育施設を見学することができました。一つめは、DIF職員のための幼児教育センター。DIFとは、Desarrollo Integral de la Familia（家庭局）の略であり、単親家庭や生活保護家庭の支援、家庭内暴力や虐待への対応を担当する組織です。歴代中央家庭局の代表は大統領夫人、地方家庭局の代表は州知事夫人という、慈善事業の性格をもった組織で、ソーシャルワーカーや臨床心理学者、医師、弁護士など多くの専門職スタッフが働いています。見学したセンター



▲DIF幼児教育センター乳児クラスの desarrollo sensorial（知覚発達）を促すコーナー

は、そうした職員の子どもたちが通う施設で、政府の出資で設立運営され、保育料は教材費だけということでした。

百八十五人の子どもたちが、生後四十五日から一歳六か月未満のラクタンテス、一歳六か月から三歳未満のマテルナル、三歳から五歳のプレスカラーの大きく三つに分かれ、それぞれが年齢で三つに分かれた九クラスで生活していました。保育時間は午前6時45分から午後有4時45分まで。朝食と昼食が給食に出ます。スタッフは施設長、保育士のほかに、小児科医、看護師、心理学者、歯科医、栄養士。ずらりと白衣のスタッフが登場したのにはびっくり。中でも歯科医は給食の献立作成にも介入し、口腔ケアと歯磨きについて、子どもへの指導や保育者へのアドバイスに加えて親教育も行うなど、重要な役割を果たしていることにも驚きました。医師と看護師の常駐する大きな保健室もあり、身体面の発

育や衛生、生活習慣の確立に力を注いでいることがうかがわれました。

二つめの日本メキシコ学院幼稚園は、大会に参加されていた山本実遙先生の案内で訪問しました。ここでは、日本人とメキシコ人の子どもたちが、年少中は混合で、メキシコでは義務教育となる年長は別クラス編成で過ごしていました。メキシコの幼稚園教育要領は、(1)個人の成長および社会的な成長(2)言語とコミュニケーション(3)数学的思考(4)周囲の探索と認識(5)芸術表現と鑑賞(6)身体の発育と健康(日本メキシコ学院日本人教師記)の六領域からなり、文字教育やコンピュータも導入した数学教育が盛んに行われているそうです。充分な学力が確認されなければ小学校には進学できず、文字と数の理解度によっては落第もあると教えられ、見学者一同びっくりしました。

(十文字学園女子大学・OMEPP日本委員会会員)